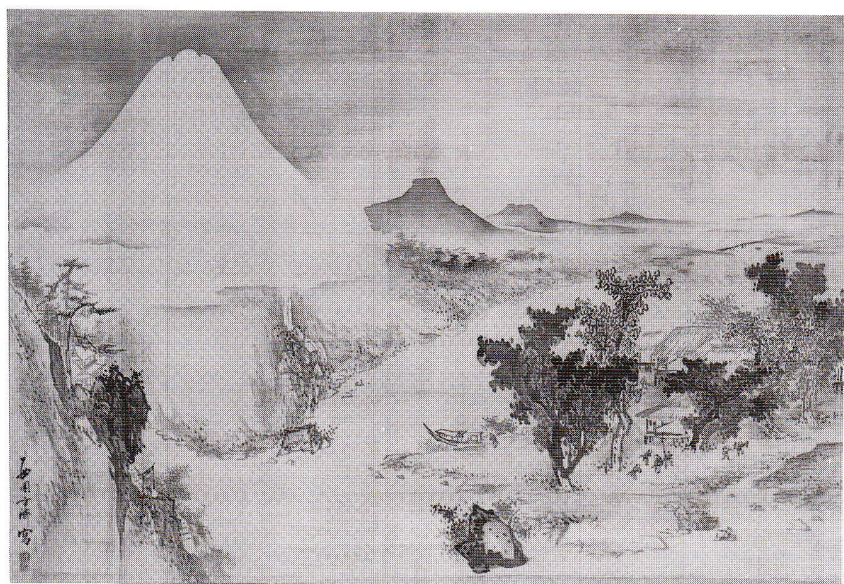


# 特別展 橋本コレクション

## 中国の絵画 —— 来舶画人 ——



方濟「富士真景図」

渋谷区立松濤美術館

会 期

昭和61年 4 月 15 日(火)

↓

昭和61年 5 月 25 日(日)

第一会場

地下一階主陳列室

第二会場

二階特別陳列室

### 概 説

17世紀から19世紀、明末から清朝の時代に中国から多くの画人が日本を訪れました。彼らは、来舶画人と総称されています。その大部分は僧侶・商人であり、専門の画家を含めて、中国の画史にはほとんど名を留めておりません。

しかし、近世日本の絵画の展開に示した役割は極めて大きく、近世日本の絵画史を語る時、彼ら来舶画人の名を欠くことはできません。また、書籍を持ち渡るなど、日中の文化交流全般において大きな役割をはたした存在であったのです。

豊臣秀吉が没して朝鮮出兵が中止され、慶長8年(1603)、徳川家康が幕府を開くに及んで、日中両国の関係は、回復の方向に向かい、中国商船の来航も年々増加しました。陳元賛<sup>ちんげん びん</sup>は、この時期に船客として来日し、寛永15年(1638)には尾州徳川家につかえました。画は文人の余技としてのものでしたが、性靈派<sup>せいれい は</sup>の詩・拳法を伝えるなど、日中文化交流史の中でその名を欠くことはできません。

17世紀中葉より日本は鎖国の時代となり、外国に対して開かれた唯一の窓口長崎が、来舶画人の主要な活躍の舞台となります。

順治11年(承応3年・1654)、隠元<sup>いんげん</sup>が来日、寛文元年(1661)には宇治に黄檗山<sup>おうぼく</sup>萬福寺が開かれました。この隠元をはじめ、木庵<sup>もくあん</sup>・即非<sup>そくひ</sup>らの黄檗僧は書とともに、禅余に画を善くしましたが、その中で特筆されるのは、隠元の招請につとめた逸然<sup>いつねん</sup>と、楊道真<sup>ようどうしん</sup>らの黄檗系画人たちです。漢画派の祖・喜多元規<sup>きた げん き</sup>、唐絵目利<sup>から え め き</sup>の渡辺秀石<sup>わたなべ しゅうせき</sup>らがそ





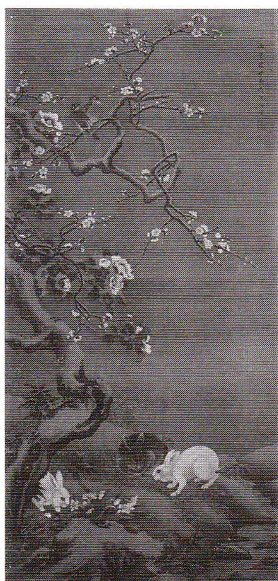
陳元贊「故山西湖図」



卽非「竹石図」



伊孚九「山水図」



沈南蘋「雪梅群兔図」



張辛「梅図」

の門にでました。漢画派は、逸然のもとらした北宗の画風に洋画の表現法を加えたもので、いわゆる黄檗画像にその特色を見ることができます。唐絵目利とは、輸入された画の鑑定・模写を職とするもので、北宗画を根幹に、独自の写生画的描写を試みましたが、沈南蘋の来日するにおよんで、画風を変化させていきました。

沈南蘋は雍正9年(享保16年・1731)に、高乾・高鈞・鄭培らの弟子を伴って来日し、享保18年(1733)に帰国しました。約2年間の短い滞在ではありましたが、明代画院の呂紀一派の系譜につながる、華麗な着色法と対象に忠実な写生主義の画風は、清新なものとして迎えられました。田能村竹田が「時に昇平日久しく、人漸く雪舟狩野二派を厭い、故に一時悉く南蘋を称し、翕然として争い趨る」と述べた状況になったのです。長崎では、唐通事熊代繻江(熊斐)が師事して日本における南蘋派の祖となり、その門から森蘭齋・真村芦江・鶴亭が出、鶴亭は京阪に南蘋派を広め、また、黒川亀玉は南蘋を学んで江戸にその画風を広めました。なお、江戸の楠本雪溪は、熊斐に学び、さらに宋紫岩(1758来日)に私淑して名を宋紫石に改めたほどでした。南蘋の影響は、此にとどまらず、円山応挙・谷文晁らにも見られるといえます。

この沈南蘋の来日にさかのぼること11年の康熙59年(享保5年・1720)、伊孚九が来日しました。彼は、貿易商ではありましたが、優れた画技を有していました。この時までの日本の南宗文人画は、中国人画家に直接師事するものではなく、例えば黄檗僧が持ち渡った画を臨模し、あるいは、画譜を通して学ぶにすぎなかったのですが、伊孚九が来日するに及んで、初めて文人画の実体にふれることが可能になったのです。伊孚九の往来した時期の長崎は北宗画が盛んであり、その影響は南蘋ほどではありませんでしたが、清水伯民が学んだほか、池大雅が私淑するなど少なからぬものがあります。なお、孚九は、太宰春台校定「古文孝経」を中国に持ち帰っており、日中文化交流に果たした役割は大きいものがあります。

この伊孚九に続いて、乾隆年間(1736~1796)には費漢源・方濟・孟涵九・費晴湖・張崑らが来日しま



した。費漢源はその名を冠した「費漢源山水画式」が世に行なわれたことで知られ、<sup>たけ べりうけぞく</sup>建部綾足らが師事しました。方済は、安永9年(1780)房州に漂着、海路長崎に送られる途次を写生し、それが「漂客奇賞図」として刊行されました。孟涵九は、仮名を書き、俳句を作るなど日本文化に理解を示した人として知られ、また、費晴湖とともに「清俗紀聞」の編纂にも関係しました。張崑は、<sup>ちようしん</sup>張莘の初名であるといわれ、<sup>はる き なん こ</sup>墨竹にすぐれ、<sup>はる き なん こ</sup>春木南湖は蘭竹の法を受けました。費晴湖は、費漢源の一族といい、山水にすぐれ、<sup>と きばいがい</sup>春木南湖・十時梅屋らが学びました。

伊孚九・費漢源(或は費晴湖)、張崑に江稼圃を加えて来舶四大家といい、日本の南画・文人画の発展に大きく貢献したことで知られます。江稼圃もまた商人であり嘉慶年間(1796~1820)に往来し、太田蜀山人と交わったほか、<sup>きのしたいつうん</sup>木下逸雲・<sup>すがい はいかん</sup>菅井梅閑・<sup>てつお</sup>鉄翁らが師事し、「鉄翁画談」には稼圃の作画についての発言が多く記録されています。嘉慶年間には、このほか、稼圃の弟の江芸閣、余崧、程赤城らが初来日しています。続く道光年間(1821~1850)には陳逸舟・<sup>かこんでん</sup>華崑田らの来日がみられます。

咸豊年間(1851~1861)は、日本が開国し中国では太平天国の乱が起きる変動の時でした。この乱を避けて徐雨亭・<sup>らせい</sup>王克三らが来日し、<sup>おうごくさん</sup>鉄翁・逸雲らと文雅の交を持ちました。

同治(1862~1874)光緒(1875~1908)年間は幕末・明治時代にあたりますが、<sup>らせい</sup>羅清・<sup>おうやばい</sup>王治梅らが来日しています。

これらの画人との交わりを求めて、多くの文人墨客が長崎に遊びました。<sup>しほこうかん</sup>司馬江漢・<sup>らいさんよう</sup>頼山陽・<sup>たのむら</sup>田能村竹田らの名をあげることができます。来舶画人の果たした役割は、単に絵画の面のみにとどまらなかったといえましょう。

本展は、橋本末吉氏が賞鑑家・研究者としての卓越した識見をもって蒐集された、国内外に著名な中国絵画コレクションの中から、来舶画人44家86点の作品と書跡など12点を選び陳列いたしました。この展観を通して、近世の日中文化交流の一翼をになった来舶画人についての一層の理解が深まることと思います。



費晴湖  
「仿米仁山水図」



江稼圃  
「清溪重嶺図」



王治梅「平林烟雨図」



徐雨亭  
「柳溪漁舟図」



羅清  
「蘭竹石図」



## 【講演会】

- 4月26日(土)午後2:00～  
「長崎にきた画人たち」  
奈良大学教授  
古原 宏伸氏
- 5月3日(土)午後2:00  
「江戸時代絵画における中国と日本」  
関西大学教授  
山岡 泰造氏

## 【美術映画会】

- 4月27日(日)午後2:00～  
「万福寺」「水墨画」「近代の水墨画」
- 5月4日(日)午後2:00～  
「江戸時代の朝鮮通信使」

## 【美術相談】

専門知識と経験豊富な美術作家を招き、みなさまの文化活動の援助になればと美術（制作）相談室を開設します。

### ★相談日・相談美術作家

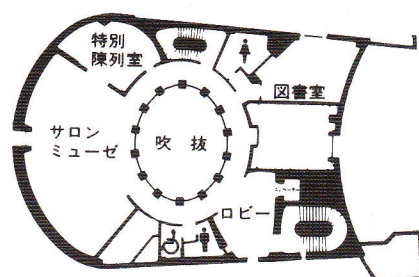
- 4月20日(日)午後1:00～4:00  
洋画家・西嶋俊親氏／日本画家・荒井朝吉氏
- 5月18日(日)午後1:00～4:00  
洋画家・遠藤原三氏／日本画家・荒井朝吉氏

### ★申込方法

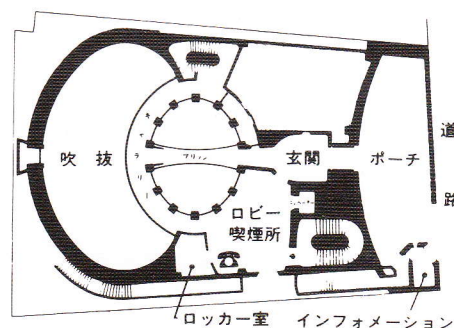
事前に電話で相談内容を申し込みください。

## 松涛美術館・平面図

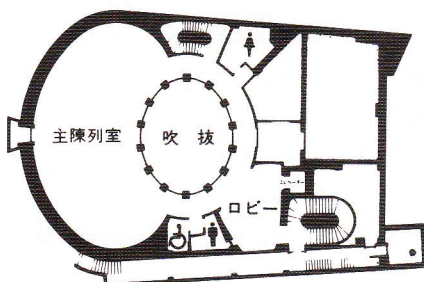
2階



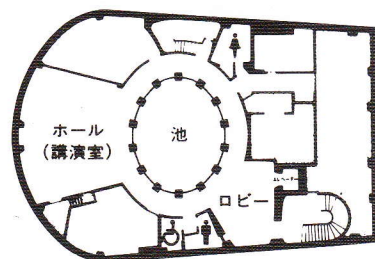
1階



地下1階



地下2階



## 案内図

◎会 期 昭和61年4月15日(火)～昭和61年5月25日(日)

※会期中陳列替をいたします。

◎休 館 日 4/21(月)・4/28(月)・4/30(水)・5/6(火)・5/7(水)・  
5/8(木)・5/11(日)・5/19(月)

◎開館時間 午前9時～午後5時（ただし、入館は4時30分）

◎入 館 料

|      | 個 人  | 団体(20人以上) |
|------|------|-----------|
| 一 般  | 200円 | 160円      |
| 小中学生 | 100円 | 80円       |

